「明海日本語」第12号（2007.3）

日本語教育三題ばなし

── 誤解と笑いと基礎知識 ──

水　谷　信　子

キーワード：聞き違い，場面，発音，文法

はじめに

落語の芸のひとつに三題ばなしというのがある。客から三つの題をもらってそれを組み込んだ話を作るというものである。三つの題が脈絡のない，関連のないものであればあるほど，それを組み込んで話をつくる技倆が問われることになる。「桜と酒と花見」のようなすぐにもまとまりそうなものは面白みがうすい。一見して関連のなさそうな話題をつなげてまとめるところに芸の見せ所があるそうである。

日本語教育三題ばなしという題で，現場の笑いに関連した挿話をつづって，何か参考になるものを提供することができれば幸いである。

以下，教室で実際に経験した笑い話のうち，聞き違いからおこった笑いの例をあげる。

1. 聞き違い ──「つまらない質問」

これは実は筆者が日本語教育の仕事を始める前のことであるが，聞き違いの例として，あげたいと思う。学生のころ，夜，ある英語学校の英語の講読の授業に出た。英語の論説や随筆を読む力をつけたいと思って通ったのであるが，テキストも興味の持てないもので，講師がぶつぶつと低い声でそれを解釈するだけの，かなり退屈な授業であった。ところが数回終わったとき講師が何か受講生に問いかけた。それが筆者には

──つまりませんか

と聞こえた。ほう，この先生，自分の講義がつまらないことを自覚しているのか，意外にえらいところがあると感心した。そこで，もう一度彼が同じ問いかけをした時，思い切って手をあげて

「はい，つまりません」

と言おうとした。その瞬間，前にいた男子学生が何か言い，講師が説明を始めた。それを聞いた時，「つまりませんか」だと思って聞いたのが

――しつもんありませんか

だったのだということが，天啓のようにひらめき，間一髪，もう少しで大恥をかくところだったと思い，それを逃れ得た幸運を胸の奥深くかみしめたのである。以来，軽薄な質問をしないよう，心がけるようになった。

ところで，「しつもんありませんか」と「つまりませんか」を国際音声記号で書くとこうなる。

[ʃjtsɯmoɯ̃arimaseŋka]　（しつもんありませんか）
[tsɯmarimaseŋka]　（つまりませんか）

じつによく似ているではないか。

音声そのものでは「しつもんありませんか」は「つまりませんか」とあまり変わらないのである。ただ，場面から言って講師が受講生に「つまりませんか」とたずねることは確率が低い。講義が一区切りついた時，講師が受講生の顔を見て話しかけたという状況から判断すれば，質問を誘っている確率がはるかに高い。質問した男子学生は，こうした状況判断から，質問と受け取ったのだと思われる。それを「つまりませんか」と受け取った若かりし日の筆者は，状況判断力が鈍かったのであろう。

2. 聞き違い――「3時」と「30」

アメリカの大学院生を集めた日本語学校につとめていたときのことである。個人指導の授業を始めたのが午後の3時半ごろだったが，始める前に，その学生に「3時をすぎると疲れますね」と言った。するとそのアメリカ人の青年はにこりともせずに

――そうですか。わたしはまだ29才です

と答えた。「3時をすぎると」を

――30をすぎると

と聞いたのである。

これも音声記号で比べてみると実によく似ている。

[saw̃ʒioswŋirɯ]　(3時をすぎる)
[saw̃ʒɯ:oswŋirɯ]　(30をすぎる)

音声的に聞き違いがおこるのも無理はないのであるが，そこには社会習慣に関連した状況の問題もある。授業の前に，「疲れる」などと愚痴を述べるのは，甘えを許す日本の社会習慣に影響された発言である。アメリカ人の青年はそうした習慣に慣れていなかったのであろう。音声の問題であると同時に，社会習慣，おおげさに言えば「文化」の問題もここに潜んでいたわけである。

3. 聞き違い ——「殺した」と「怒らした」

週末の行動を話し合っていたとき，ひとりのアメリカ人の青年がゆうべのできごとを話したが，それが筆者には

—— ゴキブリをいっぴき怒らした

ときこえた。教室にいた他の学生は別にとくに興味を示さなかったのに，教師である筆者が思わず笑ってしまったので，妙な雰囲気が生じてしまった。

ゴキブリが人間に対して怒りを表すなどということは，現実には考えにくい。人間の姿を見たら，一目散に逃げ出すのが普通である。この学生の発言の真意が「ゴキブリを怒らせた」とのではないことはわかっていたのであるが，あえてゴキブリが触角を振り立てて大柄な白人の若者に挑んだ情景を想像すると，愉快でたまらなくなって思わず笑ってしまったのは，仕事のストレスにつぶされそうになっていた筆者の束の間の反抗であったろう。もちろん教師はすぐ立ち直って，「ゴキブリをいっぴき殺した」の発音を示して，授業としての体裁を整えたのであるが，これには音声の問題と同時に文法の問題もかかわっている。

文法から言えば「ゴキブリをいっぴき殺した」というべきところ，学生は

「ゴキブリいっぴきを殺した」

と，助詞「を」を「いっぴき」のあとにつけたのである。これは英語の学生にも中国語の学生にも多いかたちである。「りんごを三つ買った」というより

—— 三つのりんごを買った

というほうが言いやすい。これは

I bought three apples.

のように，名詞の前に数詞をつける習慣が根強いためで，「お客が五人来た」より

―五人のお客が来た

のような構文のほうが使いやすい。それで，ゴキブリについても「いっぴきをころした」と言ったのであろうが，それが後続の「ころした」にむすびついて

―いっぴきおころした

となり，「ころした」の「ろ」の母音があいまいであったために「おこらした」のようになり，日本語話者である教師には「怒らした」と聞こえたのである。

4. 聞き違い ―「お天気男」

これは筆者自身でなく，ほかの教師の教室経験の話である。

数日，好天気が続いて，「毎日いいお天気ですね」と教師が言った時，あるアメリカ人の青年が

―はい，そうです。わたしが日本へ来たから，雨が降りません

と言ったように聞こえた。その教師は「おや，お天気男だな」と思ったが，こういうことを人前で言うとうぬぼれととられる恐れもあると思って，「日本へ来てから，でしょう？」と訂正したが，一瞬，本人はなぜ直されたのかわからないような顔をしていた，ということである。

もちろん「来たから」では理由を示したことになる。「来日以来」の意味なら「来てから」でなくてはならない。その点では助詞の使い方の間違いということになるのであるが，本人がそれを理解しなかったのは，自分では「来てから」と言ったつもりだったためかもしれない。

te と ta はよく似た音である。とくにアメリカ英語それも中西部の発音では［e］の音を発音する際，顎角が開いて［ɛ］のように聞こえる。この音が［æ］に近く聞こえることもあり，ときには日本人の耳には "bed" が "bad" のように聞こえたりする。したがって，「て」と「た」の区別があいまいになっている場合もあるようで，この学生の場合，「来て」と「来た」がはっきり区別できていなかった恐れもある。

文法の間違いと発音の間違いは意外に密接に結びついているのである。

5. 聞き違い ――「有名な話」

これもアメリカ人の学生があるとき，ながながと話をした。これは個人授業の時間で，教師が一人の学生に 3 分ほど話をさせ，録音して，そのあと，録音したものを聞かせて直す時間であった。ところがその学生の話は，惑星が出たりとつぜん画家が登場したり，不可解な事件が起こったりする話で，聞いている筆者にはまるで理解できない。ちょっと困った顔をしていると，その学生がにこっと笑って，

―― 先生，これは有名な話ですよ

と言った（と思った）。

当時の筆者はやたらに忙しくて，テレビも見ず，新聞も漫画しか見ない生活をしていて，新刊書に目を通すこともなかったので，「この学生が知っている程度の有名な話も知らずにいたのか」と内心，忸怩たるものがあった。黙っていると，学生はさらに「ゆうべのです」というようなことをつけ加えたので，はっとさとった。彼女が言ったのは「ゆうめいな話」ではなくて

―― ゆめの話

だったのである。

日本語の拍感覚は学習者の習得しにくいものであるが，この学生もいわゆる母音の長短の区別が不得手であった。つまり日本語で 2 拍になるものを 1 音節ですましてしまうのである。したがって「しゅじん（主人）shu-ji-n」と「しゅうじん（囚人）shu-u-ji-n」の区別，「おばさん o-ba-sa-n」と「おばあさん o-ba-a-sa-n」の区別がよくできない。そこで「夢の yu-me-no」と言ったつもりが

yu-u-me-e-no

になった。さらに英語ではアクセントのない音節の母音があいまいになるくせがあるので語尾の no は na のように聞こえたのである。

また，

―― 有名な話ですよ

の終助詞「よ」も問題を大きくしている。「よ」は自己主張のひびきを添えるから，このような場合，相手の無理解を責めるか，笑うかしたようにとられやすい。これがもし

――先生，夢の話ですから

のように言えば，話し手の意図が正しく伝わったであろう。彼女はきわめて温厚な性格で，相手である筆者を責めたり笑ったりするような人ではなかった。微笑したのは筆者の困惑を見て，事情を説明して安心させようという好意の表現だったと思われるが，「よ」をつけ加えたことで，その意図が実現しなかったのであろう。

6. 聞き違い ―― その他

その他，教室での聞き違いは枚挙にいとまがない。「一万円」を「一万年」と聞いたり，「江戸文学」を「エロ文学」と聞いたり，「あ，恐れ入ります」を「あ，それ，要ります」と聞いたりなど，日本語教育の現場は誤解と笑いの場である。そんな経験談をまとめるために「誤解と笑いと基礎知識」と三題ばなしにしたのであるが，基礎知識の中には，音声学，文法，社会習慣などが入る。どの分野も奥をきわめようとすればきりがないが，日本語教育の現場での誤解と笑いの分析には基礎的な知識で十分である。基礎知識があれば，誤解と笑いの現場をたのしく歩むことができよう。

参考文献

Osamu & Nobuko Mizutani "Nihongo Notes" vol. 1-5, 1977-83 the Japan Times
――――『外国人の疑問に答える日本語ノート』 1-4, 1988-89（上記の和訳）同上